

I 知識問題 (15 点) 以下の空欄に適切な語句を入れてください (各 1 点)

1 アテナイのデモクラシーは、哲学者 1 ソロン による借財帳消し、2 ペイシトラトス による僭主政治などを経て、血縁ではなく人工的な 10 部族制を導入した 3 クレイシテネス の改革によって制度的にはほぼ完成した。しかし、対外的にはスパルタと対立し、ペロポネソス戦争では指導者 4 ペリクレス の病死などもあり、敗戦に至る。この戦争は 5 トウキディデス の『戦史』で詳述されている。

2 ギリシア哲学は、ミレトス、エフェソスなどの都市を擁する 6 イオニア 地方でまずは発展した。哲学者 7 パルメニデス はプラトンのイデア論に影響を与えたとされる。アテナイでは、ソフィスト (智を授ける者) が活躍し、プラトンの作品名にもなっているプロタゴラスや 8 ゴルギアス が有名である。『アンティゴネ』などの劇作品を書いた 9 ソフォクレス など文学者の活躍もみられた。近代の功利主義に影響を与えた 10 エピキュロス もアテナイで活躍した。

3 ローマの共和政は、その対外的拡大の過程で、当初は 11 同盟 都市という形で他国の自治をある程度許容したが、ライバルであったカルタゴを第一次 12 ポエニ 戦争で破り、シチリア島を属州としてからは、属州長官による直接統治をおこなうようになった。国内的には貧富の格差が増大し、13 グラックス 兄弟による改革の失敗を機にローマは内戦状態に突入する。最終的にはカエサル甥 14 オクタヴィアヌス が勝利し、ローマは共和政から元首政へと移行する。元首政の最初の 2 世紀は政治が相対的に安定し、「ローマの平和」(15 パックス・ローマナ) と呼ばれた。

II 論述問題 (45 点)

1 ギリシアの政治思想について、以下の 10 の語句を用いて 400 字程度で論述をしてください。語句は一つ適切に使うごとに 1 点 (使う順番は自由。10 点満点)、論述の質に応じて最大 5 点を加算します (15 点満点)

ソフィスト、プラトン、哲人王、文学者、民主政、寡頭政、アリストテレス、ポリテイア、政治的無関心、エピクロス、キュニコス派

<解答例>

ソフィスト は社会の規範や社会制度の人工性を強調し、民主政 において、弁論術によって他者を自分の望むように動かす能力が大事であると主張した。これに対して プラトン は、客観的に正しい政治社会が存在するとし、それを認識した 哲人王 による統治が最善であるとした。民主政 は人々が悪しき欲望のままに動く政治社会だとされ、とくに民衆を惑わす存在として ソフィスト や 文学者 が批判された。アリストテレス は、優れた者が統治する王政や貴族政が理論的には望ましいとしつつも、現実のポリスが 寡頭政 と 民主政 の間で揺れ動くことをふまえて、多数の人間が公共善を目指す形で政治に参加する ポリテイア が望ましいとした。その際、彼は市民が過度に政治に関わることを政治的混乱の原因として警戒し、政治的無関心 を肯定した。さらに、エピクロス は、個人的幸福の観点から政治活動への参加に消極的であり、キュニコス派 に至っては、政治を含め、社会的活動から距離をおいた。

<解説>

・10 の語句を使いつつ、制限字数で論述をまとめるには、一定の共通テーマを設ける必要があります (たとえば、プ

ラトンやアリストテレスについては、様々な観点からの説明が可能です。共通テーマを設定せずに、他の語句と無関係の文脈で両者を説明してしまうと、全体として話がつながらず、あるいは、字数オーバーになってしまうでしょう。

・それでは共通のテーマは何か。オーソドックスな選択としては、「民主政に対する哲学者たちの態度・距離」、ということになるでしょう。ソフィスト、プラトン、アリストテレス、エピクロス、キュニコス派は、それぞれ民主政に対する態度が異なります。その違いを説明すれば、一貫した論述になるはずですが、もちろん、異なる共通テーマを選ぶことも可能ですが、本問において、10の語句を使い切る形で、他のテーマを見つけることはおそらく難しいと思います。

・それから、一つ一つの語句について、ある程度実質的な説明ができていないと、点数は付与されません。例えば、「民主政」という語句は一般的な語句だけに、使うだけなら簡単ですが、有意義な説明の文脈（たとえば、ソフィストと民主政の関係（弁論術による大衆誘導）、プラトンの民主政批判、あるいはアリストテレスが民主政とポリテイアを区別したこと、などの文脈）の中で使用されていなければ、点数は付与されません。

**2 共和政ローマの政治体制について以下の 10 の語句を用いて 500 字程度で論述してください。語句は一つ適切に使うごとに 1 点（使う順番は自由。10 点満点）、論述の質に応じて最大 5 点を加えます（15 点満点）**

**分権、合議制、護民官、混合政体、任期 1 年、君主政、マキャヴェリ、対外拡大、モンテスキュー、執行権の集中**

<解答例>

共和政ローマの特徴は、第一にその分権性にある。すなわち、王政の廃止後、一人の人間に政治権力が集中しないよう、2 人のコンスルをはじめ、各役職にはすべて合議制が採用され、かつ任期も 1 年に限定された。第二に混合政体であったことである。すなわち、王にとって代わったコンスル、重要な役職の経験者たちから成る元老院、そして民会と平民の代表者である護民官、という三つの権力が相互に牽制する仕組みであった。ただし、国家の危機時には 1 人の独裁官に期限付きで権力を集中させることもできた。マキャヴェリは、分権的な共和政ローマでは、君主政とは異なり、多数の有能な指導者がコンスタントに現れたこと、貴族と平民の争いが共和政の下で平和的に行われることによって対外拡大のエネルギーを生み出したことなどを高く評価した。これに対してモンテスキューは、共和政ローマが平民の政治参加を許したことによって内部崩壊したことを批判し、君主政を執行権の集中という点から支持した。

<解説>

・語句群からまず判断すべきは、共和政ローマの政治機構の特徴に関連する語句（分権、合議制など）と、共和政ローマについて論じた、マキャヴェリとモンテスキューとが含まれているということです。ですから、論述の型としては、①まず共和政ローマの政治制度の特徴を説明してから、マキャヴェリとモンテスキューの共和政ローマ評価を説明する、②最初から、マキャヴェリとモンテスキューの共和政ローマ論を比較・紹介する、のいずれかの型になります。解答例では、①が採用されています（①の方が書きやすいと思います）。

・分権、合議制、混合政体などの概念は抽象的で、ただこれらの語句を使っただけでは、理解可能な論述になりませんので、これらの語句の具体的な意味（たとえば、「分権を実現する（＝権力集中を避ける）ために、合議制や任期 1 年が採用される」）が説明されていないと、得点にはなりません。

・共和政であるローマの特徴は、共和政の反対概念である君主政との比較においてクリアになります。ですから、そうした視点からの論述（分権・合議制・混合政体⇔集権・独任）が必要になります。

・もう一つ共和政ローマの特徴は、アテナイの民主政と比較して、貴族政あるいは混合政体（貴族と民衆のバランスをとる）が採用されていたことです。分権、執行権の集中、といった語句群から判断すれば、共和政 vs 君主政という

視点が主であり、混合政体 vs 民主政という視点は不可欠ではありませんが（無理に後者の視点も入れようとする、説明が複雑になりすぎて字数が足りなくなるおそれあり）、混合政体、対外拡大、といった語句の説明の際に、民主政との違いも意識できると、よりよい論述になるでしょう。

・1 とは異なり、本問は語句の使い方については自由度が高い（共和政ローマの特徴はいろいろな観点から説明できる）と言えるでしょう。語句の実質的な説明がなされていて、かつそれが不適切でない限り、得点となります。

3 ギリシアの宗教について以下の 10 の語句を用いて 500 字程度で論述してください。語句は一つ適切に使うごとに 1 点（使う順番は自由。10 点満点）、論述の質に応じて最大 5 点を加算します（15 点満点）

俗人と区別された聖職者集団、公選、多神教、政治権力と教会権力の並立、神々の力の制限、批判と敬愛のバランス、神々のアレゴリー化、ルソー、ヒューム、コンスタン

<解答例>

ギリシアの宗教では、俗人と区別された聖職者集団が存在せず、聖職者は他の公職者と同様にしばしば公選された。またキリスト教などの一神教と異なり、互いに協力したり、対立したりする神々を奉じる多神教であった。ルソーは、中世以降のヨーロッパにおいて、政治権力と教会権力が並立し、互いに争ったことを批判し、宗教が政治権力によって統御されていた点をもってギリシア宗教を評価した。これに対してヒュームは、ギリシアでは多神教が奉じられたために、絶対的な力を神に与える一神教とは異なり、神々の力の制限が可能になり、その結果、思考の自由が可能になった点を評価した。コンスタンは、神話文学の中で描かれる、徳と欠点を持つ人間的な神々に対して、人々が批判と敬愛のバランスの取れた姿勢をとることによって、公職者に対して批判と敬愛のバランスの取れた態度をとる、というデモクラシー維持に必要な精神がつつかわれたと考えた。しかし、神々の完璧性・加護に期待する信者の気持ちが、神々のアレゴリー化、つまり神々を特定の徳・価値の完璧な体現者であるとみなす傾向を促進した結果、そのようなバランスが崩れ、それがデモクラシーの衰退を招いたと考えた。

<解説>

・ギリシア宗教は、西洋政治思想史において、キリスト教との対比において、①宗教が政治と一体化していた点、②一神教ではなく多神教だった点、から論じられてきた点は授業で説明しました。本問の語句群はこの二つの視点に関わるものです（語群を二分すると、①：俗人と区別された聖職者集団の不在、聖職者の公選、政治権力と教会権力の並立、これらを支持したルソー。②：神々の力の制限、ヒューム、批判と敬愛のバランス、アレゴリー化、コンスタン）。二種類のギリシア宗教理解が存在した、という点を意識すると、すっきりした論述ができるでしょう。

・2 と同様、本問も、ギリシア宗教と、それを論じたルソー、ヒューム、およびコンスタンについての問題です。ですから、①ギリシア宗教の特徴について一般的に説明したあと、論者たちの評価を説明してもよいですし、②最初から、三人のギリシア宗教論の説明に入ってもよいですが、解答例は①となっています。ただし、字数制限との関係で、前半の一般的な説明は短くなっています。

・本問はもちろん、ギリシア多神教とキリスト教の比較論になっています（俗人と区別された聖職者集団、政治権力と宗教権力の並立、はキリスト教（正確に言えばカトリック教会）の特徴です）。その点を意識できていると、しっかりした論述になるでしょう。